

文学博士松村博司君の「榮花物語の研究」に対する授賞審

査要旨

松村博司君の「榮花物語の研究」は二十五年にわたる研究の成果を総合的にまとめた著書である。榮花物語の研究は明治三十一年から四十年にかけて和田英松、佐藤球両氏の榮花物語詳解が刊行され、一時期を訓したが、それ以後研究は殆ど進められなかつたのを松村君はとりあげて専心研究をつづけ本書を完成するに至つたのである。

本書は六篇にわけられ、第一篇諸本の研究、第二篇成立の研究、第三篇内容の研究、第四篇影響の研究、第五篇統篇の研究及び余篇からなつてゐる。第一篇に於ては諸伝本の系統を厳密な校訂のもとに調査し、その結果古本系統(三条西家本等)、流布本系統(西本願寺本、古活字本等)、異本系統(富岡家旧蔵本等)と三大別した。そうして古本系統を二種にわかち、第一種の三条西家本は鎌倉中期を下らぬ写本で最も貴重であるとし、三条西家本とやや種類を異にするものとして陽明文庫本をこれにつぐものとし、古本系統の第二種とする。流布本系統も二種にわけ、第一種の西本願寺本は現存流布本系統の最古の完本として極めて貴重であり、飛鳥井雅章本はこれの転写本であるとしてゐる。流布本第二種として古活字本、明暦二年刊本をあげ、これらの錯簡等は西本願寺本、雅章本によつて訂正補充することが出来るとする。異本系統としては富岡家旧蔵甲本、富岡家旧蔵乙本、為親卿真蹟本等をあげている。異本系統の成立についてのべ、異本系統本は三系統本の中、最も文体が簡潔であるが内容は豊富で後からの添加があり、

そういう部分は典拠に近い文体になつてゐる所が多いとし、三条西家本と富岡家旧蔵本とを比較した結果、富岡本系統は改修本であり、古本系に手を入れたものであるとしてゐる。改修の時期は千載集の成立した文治四年以後、新古今集成立以前とし、世継物語というよび名からその時期を平安時代末とし、改修者は男性であり、藤原為業ではないかと推測してゐる。更に以上の三系統本と異なる本文をもつものとして兼好法師眞蹟本、金沢文庫本榮花物語断簡、小林正直旧蔵本を挙げてゐる。兼好法師眞蹟本は異本系統本に一致する部分もあるが、三条西家旧蔵本と一致する部分が多く、又金沢文庫本断簡も三条西家本、富岡家旧蔵本の両要素を有して居り、二本は同一のものではないかとしている。又小林本も兼好本と同じ傾向を有して居り、これらは三条西家本、富岡家旧蔵本の両者と一致する点もあるが、特有の点もあり、独自の系統と見られることを主張してゐる。是等は異本系統本の成立後、古本系統本の如きものと異本系統本と再び接触して生じたものであるとし、二系統本の混合本文という意味で流布本中の一異本とすべきであると論じてゐる。更に三の系統本の關係を論じ、つぎに巻名について考察してゐる。第一篇は著者の最も力を注いだ所であるが、特に異本系統本が改修本でありかつ改修の行われた年代をあらゆる点から考証して結論を出した点など卓出した部分である。古本と流布本との相違を明らかにし、古本の中でも二十巻までが最も原型に近いとし、二十巻以後は手が加えられたとしている点、吉田兼好本などの特殊系統本の性格を明瞭にした点などもすぐれた新見解である。

第二篇成立の研究では全四十巻を二大別する説を精細にのべた後、三十巻と後の十巻との間に境をおいて正統兩篇に分つことが定説となつてゐることをとき、つぎに正篇を更に区劃する説を批判して正篇を二分することは従いがた

いとし、正篇三十卷は一人の統轄者によつてまとめられたと論じている。また作者については藤原為業説をあげてこれを従い難いとし、赤染衛門説を検討した結果、榮花物語著作に参与した最も有力な一人であることを豊富な資料によつて実証している。つぎに正篇の典拠となつた文献について詳細な調査を行い、この物語は年代記的な部分、記録的な部分、挿話的な部分、物語的な部分等に分類することが出来、また別の見地から作者の創作的な部分、作者以外の人の手に成る既成の文を利用した部分、既成の文のままの部分、既成の文に手を加えた部分などがあるとす。そして典拠の中、主要なものとして源氏物語、紫式部日記、後拾遺集、三宝絵詞、往生要集等について榮花物語との比較調査の結果、榮花物語は編纂物としての性質が多くあるが、作者特有の取材の傾向、筆致、文体、語彙、文法等が認められる上に、典拠を使用する際に個人的性癖が見出されるとし、従つてこの作を個人的創作と認められるとしている。

第三篇内容の研究に於てはその組織と歴史的文学的特質とを扱つて編年史的組織の中に物語意識を織りこんだことをのべ、更に道長物語としての構想と叙述とを考察している。つぎに榮花物語の中に見られる八百八語の「あはれ」を分析してこの物語の美意識を考察し、この物語に於ける榮花の讚歎と他の一面としての悲哀の精神とはこの物語に通ずる二の精神であるとしている。

第四篇影響の研究に於ては榮花物語を先驅として作られた歴史物語の名称や作品やその性格を論じ、叙述形式と内容を扱い、つぎに榮花物語の影響をうけた作品を考察し、特に古本説話集、世継物語（宇治大納言物語と称せられるものと大同小異の説話集）との関係を明らかにし、与謝野晶子の新訳榮花物語との関係をとりあげている。第五篇統篇

の研究は第二篇と関連して、榮花物語の卷三十一から卷四十に至る続篇十卷の成立作者等について考察している。近世以来の諸家の研究を紹介、批判した上で、著者については与謝野氏が続篇七帖は出羽弁、後の三帖は逸名女房の作とする説を裏証的に考察した結果妥当と認め、更に続篇三帖の作者として周防内侍説を一説として支持している。かつ続篇のうち第一部七帖は延久四年以後まもなく弁六十五歳の頃の作であるとし、続篇第二部三帖は卷四十の最終記事たる寛治六年以後遠からぬ時に成立したとしている。余篇として三条西実隆公拔書榮花物語、本居太平著榮花物語会説抄を考察し、榮花物語研究史略年表を附してある。

本書は榮花物語の従来の研究を精細に検討した上で著者の研究を展開せしめている。諸篇いずれも著者の開拓した点が多いが、特に第一篇諸本の研究は著者によつて殆どすべてが開拓されたと言つてもよく、榮花物語詳解では諸本をあげて解説を加えるにとどまつたのに対して、本書では現存諸本の殆どすべてを調査した上で三の系統及び特殊系統にわかれ、相互の異同及び関係を明らかにし、その成立の順序をも確定したのは最も推奨するに足る。

その他の諸篇に於ても典拠の研究をはじめ開拓する所多く、作者論の如き従来の説を確認するに止まつた場合に於ても、それをあらゆる点から調査した上で行つて居り、著者の努力の跡は明らかに認められる。資料の豊富なる上にその処理の方法が科学的で明快であり、透徹しているのも本書のすぐれた点と言える。著者はこの書の外に榮花物語の本文校訂と注釈とにすぐれた成果を示して居る。また本書の中第三篇の内容の研究では榮花物語の文学性について補うべき点もあるがこれについては本書刊行の後に発表した「榮花物語の和歌の諸問題」等の論攻もある。本書は榮花物語研究史上の劃期的な業績として推賞するに足ると認められる。